

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
理念に基づく運営	<u>11</u>
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
安心と信頼に向けた関係づくりと支援	<u>2</u>
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	<u>6</u>
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	<u>11</u>
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	<u>30</u>

事業所番号	2395300011
法人名	有限会社 ふなびきメディカル
事業所名	グループホーム ほほえみ扶桑
訪問調査日	平成20年12月18日
評価確定日	平成21年1月23日
評価機関名	福祉総合調査研究機関 株式会社 ヤトウ

項目番号について
 外部評価は30項目です。
 「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。
 「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。
 番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

記入方法
 [取り組みの事実]
 ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。
 [取り組みを期待したい項目]
 確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に をつけています。
 [取り組みを期待したい内容]
 「取り組みを期待したい項目」で をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

用語の説明
 家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。
 家族 = 家族に限定しています。
 運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者(経営者と同義)を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。
 職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みません。
 チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

作成日 平成21年1月26日

【評価実施概要】

事業所番号	2395300011
法人名	有限会社 ふなびきメディカル
事業所名	グループホーム ほほえみ扶桑
所在地	丹羽郡扶桑町大字南山名字本郷289番地 (電話) 0587-92-4483

評価機関名	福祉総合調査研究機関 株式会社 ヤトウ		
所在地	名古屋市中区金山一丁目8番20号 シャローナビル7階		
訪問調査日	平成20年12月18日	評価確定日	平成21年1月23日

【情報提供票より】(平成20年11月1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	昭和(平成) 20年4月1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	18 人	常勤	9人, 非常勤 9人, 常勤換算 人

(2) 建物概要

建物構造	鉄骨	造り
	2階建ての	1~2階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	30日: 51,000 円 31日: 52,700 円	その他の経費(月額)	31,500 円	
敷金	有(円)	(無)		
保証金の有無(入居一時金含む)	有(円)	有りの場合償却の有無	有 / 無	
食材料費	朝食	380 円	昼食	550 円
	夕食	450 円	おやつ	150 円
	または1日当たり 円			

(4) 利用者の概要(平成20年11月1日現在)

利用者人数	17 名	男性	5 名	女性	12 名
要介護1	1名	要介護2	5名		
要介護3	6名	要介護4	1名		
要介護5	4名	要支援2	0名		
年齢	平均 87 歳	最低	56 歳	最高	96 歳
協力医療機関名	医療法人 ふなびきクリニック				

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

のどかな田園地帯の中に2階建てのホームがある。門を入ると「おかえりなさい」と大きく書かれた木札が飾られている。玄関には笑顔満開と証して入居者、職員の笑顔の写真が出迎えてくれる。各居室の床、壁、カーテンの色やドアのデザインが違っており、入居者が自分の部屋と分かるようになっている。入居者や家族が笑顔で、明るく楽しく元気よく過ごしてもらうには、職員が明るく元気で笑顔でいることが大切と考え取り組んでいる。また、地域の行事に参加し交流する中で、入居者が地域に根差し、その人らしく暮らせるよう支援している。連携法人の病院や介護老人福祉施設と連携ができていて、医療面、研修会などバックアップ体制がしっかりできている。

【重点項目への取組状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取組、改善状況(関連項目:外部4)
	初回のため前回の評価はない。
重点項目	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	自己評価は全職員が取り組み管理者がまとめた。評価について職員から「自分のケアの見直しになり、初心に帰る気持ちになった」との声があり、日常業務の見直しや振り返りのよい機会になった。また、第三者の客観的な視点で自分達の行なっていることを見てもらう機会としても捉えている。
重点項目	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4,5,6)
	入居者、家族、自治会役員、役場の介護保険課職員、地域包括支援センター職員、理事長、管理者、職員の参加で2カ月に1回開催している。会議では毎回講師(警察署、消防署、保健所など)を招いての講演、ホームの活動や行事予定など報告し、メンバーから要望や意見、助言を得てサービスの質の向上に努めている。家族には会議の開催案内と議事録を送付している。
重点項目	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7,8)
	年2回の家族会や運営推進会議で家族から意見や苦情など聞く機会がある。また、面会時にも職員は家族に声をかけ、話しやすい雰囲気づくりを心がけ、傾聴するよう努めている。玄関に意見箱を設置し、苦情相談窓口などについては契約時に説明を行なっている。
重点項目	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	自治会に加入し会合に出席したり、地域の枝垂れ桜まつりや納涼祭などに参加して交流を図っている。近隣の保育園の運動会や生活発表会に出かけたり、校外学習で中学生の訪問などあり、子どもとのふれあいを楽しんでいる。散歩する時は挨拶をかわすよう心がけている。地域の方の庭にみかん狩りに行き自分で取る楽しさを味わうことができた。

2. 評価結果（詳細）

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	事業所の理念として「地域の中に根ざしご近所付き合いを大切に、明るく楽しく元気よく、一人ひとりが自分らしく生活できる場所」を昨年管理者と職員で話し合いつくりあげた。職員が明るく元気で笑顔でいれば、入居者や家族皆が笑顔になり、明るく元気に地域の中でその人らしく笑顔で暮らし続けることを目指している。		
2	2	理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	日々の申し送りや月1回の全体ミーティングで理念について話し合いの機会を持ち、意識の向上に努めている。また、玄関の目につきやすい場所に理念を掲示し意識できるようにしている。職員はどんな時でも明るく笑顔で傾聴する気持ちを大切に、常に理念を念頭に支援している。		
2. 地域との支えあい					
3	5	地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	自治会に加入し管理者は会合に出席しホームの様子を伝えている。地域の枝垂れ桜まつりや納涼祭などに参加したり、作品展に入居者の作品（ロープで作った犬、自作の短歌を書いた色紙など）を出品するなど交流を図っている。また、近隣の保育園の運動会や生活発表会の見学、中学生の校外学習の受け入れなど子どもとのふれあいも楽しんでいる。		自治会の会合、地域の行事など積極的に参加し、今年から自治会役員の方が運営推進会議のメンバーに加わり、ホームの基盤もかなりできてきた。今後はともに暮らす地域住民の一員として、地域で必要とされる活動や役割を担っていくことを期待したい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	職員にはこの一年間の地域での関わりを書いた「地域との支えあい」を配布し、分からないところは管理者に聞きながら、全職員で自己評価に取り組んだ。職員から「自分で気づけなかった点が見直しになった」「初心に帰る気持ちになった」との声があり、日常業務の見直しや振り返りのよい機会になっている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	<p>運営推進会議を活かした取り組み</p> <p>運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている</p>	<p>今年の2月から地域住民代表として自治会役員の参加があり、入居者、家族、扶桑町役場職員、地域包括支援センター職員、理事長、管理者、職員の参加のもと2カ月に1回開催している。会議では毎回テーマを決め講師を招いての講演、ホームの行事活動や今後の予定など報告し、メンバーから意見や要望、助言を得てサービスの向上に努めている。</p>		
6	9	<p>市町村との連携</p> <p>事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる</p>	<p>役場の介護保険担当課や地域包括支援センターによく出向き、事業所の状況など伝え相談したり、資料や情報を収集するよう努めている。無料で借りられる介護タクシーの利用や施設の空き情報など教えてもらい、情報収集してサービスの質の向上を目指している。</p>		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	<p>家族等への報告</p> <p>事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている</p>	<p>入居者個々の担当職員による近況報告、写真、行事予定が掲載された「ほほえみ扶桑だより」を2カ月に1回家族に送付している。面会時にも職員は入居者の日々の様子や暮らしぶりを伝えている。健康面での変化や連絡事項がある時はその都度電話で連絡している。金銭管理は出納帳にレシートを貼り収支がきちんと記入されている。</p>		
8	15	<p>運営に関する家族等意見の反映</p> <p>家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている</p>	<p>家族の要望で行事に合わせた年2回（5月、9月）の家族会や運営推進会議の時に家族からの意見、要望など聞いている。また、面会時に職員は家族に声をかけ、話や相談などしやすいようにコミュニケーションを図っている。苦情相談窓口などについては契約時に説明を行ない、意見箱を玄関に設置している。</p>		
9	18	<p>職員の異動等による影響への配慮</p> <p>運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている</p>	<p>管理者は職員の悩みや相談など話をよく聞くように心がけ、離職を抑えるよう努めている。新しい職員は入居者一人ひとりのポイントを先輩職員に付き添いながら教えてもらい、入居者に不安やダメージを与えないよう配慮している。どの職員でも同じケアができるように、声かけや介助の仕方などケアの統一を図っている。</p>		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホームでは毎月の全体ミーティングでその時のニーズに応じた勉強会を行なっている。連携法人の内部研修（口腔ケア、胃ろうなど）が月1回あり参加している。外部研修の情報は回覧し、自主的に参加できるようにしている。参加後は報告書を記入し会議で報告を行ない、情報を共有している。日々のケアの中で管理者が直接指導したり、職員同士お互い教え合いスキルアップを図っている。		
11	20	同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	愛知県認知症高齢者グループホーム連絡協議会に加入している。また、地域包括支援センターが主催する扶桑町グループホーム合同研修会（4施設）に参加し、情報交換や事例検討を行ない質の向上に励んでいる。今後は相互訪問をしたいと考えている。連携法人内の他のグループホーム職員や他の介護サービス事業者と研修会などで交流する機会がある。		
.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐徐に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居相談があるとまず家族から話を聞き、その後、本人と一緒にホームに来てもらう。ホーム内を見学し、入居者と一緒にお茶を飲んだり、行事に参加するなど少しでも職員やホームに馴染んでもらうよう工夫している。入居する時はアルバムや馴染みの物を持って来てもらい、コミュニケーションを密にして徐々に慣れていけるよう支援している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	生活を共にする中で、洗濯物干し、たたみ、掃除、食器の片付けなどできることは職員と一緒にしている。また、着物のたたみ方、裁縫、人に対しての礼儀、地元のことなど入居者にいろいろ教えてもらい、お互いできること、できないことを補いながら共に支えあう関係を築いている。職員は入居者から「いつもありがとう」と言葉をかけてもらい励みになっている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	<p>思いや意向の把握</p> <p>一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している</p>	<p>一人ひとりの希望や意向は担当会議や日常の会話の中から把握するよう努めている。歩行が困難な入居者は音の出る楽器（タンバリン、缶に石や鈴を入れた物など）を枕元に置き、用事がある時はそれを鳴らして意向を伝えている。把握が困難な場合は日頃の行動や表情から汲み取り、見守りと気配りを重点に支援している。</p>		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	<p>チームでつくる利用者本位の介護計画</p> <p>本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している</p>	<p>入居者の立場に立ち介護計画を作成している。アセスメントで本人や家族から情報を収集し、これを元に本人、家族、入居者の担当職員、計画作成担当者、管理者でサービス担当者会議を開いている。本人、家族の意向や残された能力を維持し、家の暮らしと同様な生活を送ることができる介護計画が作成されている。介護計画は介護支援専門員から職員に説明され、情報を共有し計画に沿ったケアに努めている。</p>		
16	37	<p>現状に即した介護計画の見直し</p> <p>介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している</p>	<p>職員は入居者の日々の状態を把握し、情報を共有している。また、担当者は申し送りノートや日々の様子、気づき、ケアの結果などを個人票に記録している。こうした情報を元に毎月のカンファレンスで話し合い、介護計画の設定期間毎にモニタリングし、サービス担当者会議を行っている。会議には必ず本人と家族にも参加してもらい、意向や要望を聞き計画を見直している。入居者の日々の変化に対しては、臨機応変に対応し、実情に即した計画の見直しに取り組んでいる。</p>		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	<p>事業所の多機能性を活かした支援</p> <p>本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている</p>	<p>ホームの連携法人がクリニックで協力医であり、週2回の訪問リハビリや月4～5回の往診を受けている。定期的に来訪し昼食を入居者と共にして一日をホームで過ごす家族もあり、他の入居者とも良好な関係である。他の入居者の家族へも状態を見ながら、ホームで共に過ごす時間を持つ支援を積極的に進めたいと考えている。また、入居者からの要望を踏まえて、買い物同行と送迎にも取り組んでいる。</p>		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	<p>かかりつけ医の受診支援</p> <p>本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している</p>	<p>かかりつけ医へ受診する場合は、ホームから入居者の情報を伝え、受診結果や服薬等の情報は家族から受け、ファイルして保管している。また、入居者の入院時の情報提供や、入院中の入居者の情報を入手して、退院に向けて取り組んでいる。協力医療機関には認知症の専門医があり、認知症の相談や指導を受けている。かかりつけ医への受診は、原則家族が対応としているが、ホームからの通院支援も行っている。</p>		
19	47	<p>重度化や終末期に向けた方針の共有</p> <p>重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している</p>	<p>ホームとして医療連携体制加算を受けており、重度化に関する方針を作成し、契約時に説明している。看取りについては、本人や家族の要望により、できる限りの対応と支援を行っている。管理者は入居者に変化があると、家族と話し合い意向を確認しつつ、医師や看護師、理学療法士、作業療法士、言語療法士などと話し合い、これなどを基に対応し、さらに職員とも話し合い、できる範囲を確認しながらケアに取り組み、経過を基にマニュアルを作成している。</p>		
. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	<p>プライバシーの確保の徹底</p> <p>一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない</p>	<p>個人情報保護規定を定めており、職員は個人情報の保護について理解している。入居者への声かけや言葉遣いには十分注意して、入居者の誇りやプライバシーを損ねることの無いよう配慮している。大勢のボランティアや見学者がある時は、表札を半分隠したり、顔写真を出す時は本人、家族の同意を得ている。個人の記録は見守りをしながらフロアで記載している。</p>		
21	52	<p>日々のその人らしい暮らし</p> <p>職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している</p>	<p>基本的な1日の流れはあるが、入居者一人ひとりのペースに合わせ、その人らしく過ごせるよう支援している。4時30分頃起床する方には本人のペースに合わせて朝食を5時30分頃に食べてもらっている。訪問時、居間で新聞、テレビ観賞、ちぎり絵をして過ごす方、居室で休んでいる方など思い思いに過ごしている姿がうかがえた。</p>		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	使い慣れた食器を持ち込んでもらい、職員の見守りのもとその人に合った食べ方で食べている。昼、夕食のおかずは連携法人の給食室で調理され、ホームでは毎食ご飯を炊き、汁物を温めて提供している。朝食は食材が配送されホームで調理している。入居者は片付けや食器洗いなど、できることを職員と一緒にに行っている。おやつは入居者の好みを取り入れ、パフェやポンチ、ぜんざい等を職員が作っている。また、田楽パーティー、五平餅パーティー等を行い、家族の協力も得て一緒に楽しんでいる。		
23	57	入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	家族からの要望と外部評価の結果からリフト浴を取り入れ、入浴回数の増加に取り組んでいる。入居者の状態に合わせてゆったり入ってもらえるよう心がけ、お湯はかけ流しにしている。入居者の好みの温度を把握し、一覧表にして全職員が共有し入浴支援を行っている。5月の菖蒲湯や冬至の柚子湯を沸かし、柚子を布袋に入れて誤食防止に配慮しながら楽しんでいる。入浴したがる方には、言動や表情、タイミングをみて声かけし、入浴してもらえるようにしている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	入居者の得意なことや趣味などを把握し、こうしたことを入居者が行うことによって、ホームでの生活がその人らしい、生きがいのある暮らしになるよう支援している。秋には町の作品展があり、入居者が自作の短歌を色紙に書き出品した。また、時節柄、年賀状を入居者ができる所を書くなどして、家族や知人に出しており、職員と一緒に取り組んでいる。		
25	61	日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	天候に合わせて毎日散歩をするよう心がけ、入居者の体調に配慮しながらコースを変えたり、葉書をポストに出しに行く等、目的を持って屋外へ出るよう努めている。定期的な外出として、行事担当者が年間計画を立て「ほほえみ扶桑だより」に載せ家族への参加を呼びかけている。秋には近くの保育園の運動会を見に行ったり、自治会長所有の庭へみかん狩りに行き、入居者は日常の行動以上に身体を動かすことになり、リハビリの一環になっている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	管理者や職員は鍵をかけないケアの重要性を認識しており、必要以上に施錠しない方針である。門扉は入居者の安全上施錠し、玄関は音で感知するドアベルを設置して、夜間のみ防犯上から施錠している。玄関やフロアは施錠していないことから、入居者は屋外への出入りが自由で、テラスや庭先へ出て花を眺めたり、草取り、ティータイムを楽しんでいる。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
27	71	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	防災計画に基づき、避難訓練を消防署の指導を受けながら昼間の災害を想定して入居者も参加のもと実施している。防災についての講習会を運営推進会議に合わせて行い、講師は消防署職員で、入居者や家族、職員が参加して防災に対する意識を高める取り組みをしている。自治会長や組長へは緊急時の協力をお願いをしている。災害用備蓄は3日分を目安に準備している。		防災に対する意識を持ち昼間の災害を想定しての避難訓練を実施しているが、より条件が悪く、避難が困難な夜間を想定しての避難訓練の実施についても検討されることを期待したい。
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は連携法人の管理栄養士によって季節感のあるバランスの取れた食事になっている。治療食は入居者の状態、希望、好み等を把握し、反映した内容を給食室で調理している。体重のチェックは毎月行っており、健康管理に配慮している。食事は、おかゆやミキサー食、きざみ食、一口大にする等のほか代用食など、入居者の状態に配慮した食事内容になっている。水分摂取は入居者の湯飲みやカップの量でチェックし、1日1を目標にしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関は家庭的な雰囲気であり、壁には行事の写真や、ちぎり絵など入居者の作品が掲示されている。フロアには、畳コーナーがあり、入居者の休息や洗濯物をたたんだりしている。また、加湿器が設置され、適度な湿度が保たれ健康に配慮している。浴室の窓からは坪庭が眺められ、ゆったりと入浴ができる。		
30	83	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室ごとに扉、床、カーテン、照明器具などの色、デザインに変化をもたせている。入り口には顔写真入りの表札と、扉には入居者の目線に合わせて、名札を付けている。室内には、使い慣れた家具やベッド、椅子などが持ち込まれており、壁には写真や入居者の作品が飾られ、プライベート空間として居心地良く過ごせるよう配慮している。職員の発案により、ナースコールの代わりに、タンバリンや空き缶に鈴や小石を入れて、入居者ごとに音色を変えることで、入居者が鳴らすと判別できるようにしている。		

は、重点項目。

WAMNETに公開する際には、本様式のほか、事業所から提出された自己評価票（様式1）を添付すること。